鵺

楠山正雄

一

ある時《とき》天子《てんし》さまがたいそう重《おも》い不思議《ふしぎ》な病《やまい》におかかりになりました。なんでも夜中《よなか》すぎになると、天子《てんし》さまのおやすみになる紫宸殿《ししいでん》のお屋根《やね》の上になんとも知《し》れない気味《きみ》の悪《わる》い声《こえ》で鳴《な》くものがあります。その声《こえ》をお聞《き》きになると、天子《てんし》さまはおひきつけになって、もうそれからは一晩《ひとばん》じゅうひどいお熱《ねつ》が出て、おやすみになることができなくなりました。そういうことが三日《みっか》四日《よっか》とつづくうち、天子《てんし》さまのお体《からだ》は目に見《み》えて弱《よわ》って、御食事［＃「御食事」は底本では「後食事」］《お

しょくじ》もろくろくに召し上がれないし、癇ばかり高ぶって、見るもお気の毒な御容態になりました。

そこで毎晩御所を守る武士が大ぜい、天子さまのおやすみになる御殿の床下に寝ずの番をして、どうかしてこの妖しい鳴き声の正体を見届けようといたしました。

するうちそれは、なんでも毎晩おそくなると、東の方から一むらの真っ黒な雲が湧き出して来て、だんだん紫宸殿のお屋根の上におおいかかります。やがて大きなつめでひっかくような音がすると思うと、はじめ真っ黒な雲と思われていたものが急に恐ろしい化け

もの形になって、大きなつめを恐れ多くも御所のお屋根の上でといでいるのだということがわかりました。

しかしこうして捨てて置けば天子さまのお病はいよいよ重くなって、どんな大事にならないとも限りません。これは一日も早くこの怪しいものを退治して、天子さまのお悩みを鎮めてあげなければならないというので、お公卿さまたちがみんな寄って相談をしました。

なにしろそれにはなに一つし損じのないように、武士の中でも一番弓矢の技のたしかな、心のおちつ

いた人をえらばなければなりません。あれかこれかと考(かんが)えてみますと、さしあたり源頼政(みなもとのよりまさ)の外(ほか)に、この大役(たいやく)をしおおせるものがございません。そこで相談(そうだん)がきまって、頼政(よりまさ)が呼(よ)びだされることになりました。

どうして頼政(よりまさ)がそういう名誉(めいよ)を担(にな)うようになったかと申(もう)しますと、いったいこの頼政(よりまさ)は、あの大江山(おおえやま)の鬼(おに)を退治(たいじ)した頼光(らいこう)には五代(だい)めの孫(まご)に当(あ)たりました。元々(もともと)武芸(ぶげい)の家柄(いえがら)である上に、生(う)まれ付(つ)き弓矢(ゆみや)の名人(めいじん)で、その上和歌(わか)の道(みち)にも心得(こころえ)があって、礼儀作法(れいぎさほう)のいやしくない、いわば文武(ぶんぶ)の達人(たつじん)という評判(ひょうばん)の高(たか)い人だったのです。

二

頼政(よりまさ)は仰(おお)せを承(うけたまわ)りますと、さっそく鎧胴(よろいどう)の上に直垂(ひたたれ)を着(き)、烏帽子(えぼうし)を被(かぶ)って、丁七唱(ちょうしちとなう)、猪早太(いのはやた)という二人(ふたり)の家来(けらい)をつれて、御所(ごしょ)のお庭(にわ)につめました。唱(となう)には雷上動(らいじょうどう)という弓(ゆみ)に黒鷲(くろわし)の羽(はね)ではいた水破(すいは)という矢(や)と、山鳥(やまどり)の羽(はね)ではいた兵破(ひょうは)という矢(や)を持(も)たせました。早太(はやた)には骨食(ほねくい)という短刀(たんとう)を懐(ふところ)に入(い)れてもたせました。

ちょうど五月雨(さみだれ)が降(ふ)ったり止(や)んだりいつもうっとうしい空(そら)のころで、夜(よる)になるとまっくらで、月(つき)も星(ほし)も見(み)

えません。その中であやしい黒い雲がいつどこからわいて来るか、それを見定めるのはなかなかむずかしいことでした。するうち夜中近くなると、いつものとおり東の空からその黒い雲がわいて来たものと見えて、天子さまは、おひきつけになって、おこりをおふるい出しになりました。

頼政は黒い雲が出てきたようだとは思いましたが、一めんにまっくらな空の中で、何が何だかさっぱりわかりません。一生懸命心の中で八幡大神のお名をとなえながら、この一の矢を射損じたら、二の矢をつぐまでもなく生きては帰らない覚悟をきめて、まず水破

という鏑矢（かぶらや）を取（と）って、弓（ゆみ）に番（つが）えました。するうちだんだん紫宸殿（ししいでん）のお屋根（やね）の上が暗（くら）くなって、大きな黒（くろ）い雲（くも）がのしかかって来（き）たことが闇夜（やみよ）にも見分（みわ）けがつくようになりましたから、ここぞとねらいを定（さだ）めて、その雲（くも）の真（ま）ん中（なか）めがけて矢（や）を射（い）こみました。やがて鏑矢（かぶらや）がぶうんと音（おと）を立（た）てて飛（と）んで行きますと、確（たし）かに手ごたえがあったらしく、急（きゅう）に雲（くも）が乱（みだ）れはじめて、中から、

「きゃッ、きゃッ。」

と鵺（ぬえ）のような鳴（な）き声（ごえ）が聞（き）こえました。

一の矢（や）がうまく行ったので、頼政（よりまさ）はすかさず二の矢（や）に兵破（ひょうは）という鏑矢（かぶらや）を射（い）かけますと、こんども正（まさ）しく手

ごたえがあって、やがてどしんと何(なに)か重(おも)いものが、屋根(やね)の上におちたと思(おも)うと、ころころところげて、はるかな空(そら)からお庭(にわ)の上までまっさかさまにおちて来(き)ました。家来(けらい)の唱(となう)が、

「すわこそ。」

と駆(か)け寄(よ)って、ばけものを押(おさ)えますと、早太(はやた)があずかっていた骨食(ほねくい)の短剣(たんけん)を抜(ぬ)いて、ただ一突(ひとつ)きにしとめました。

頼政(よりまさ)が首尾(しゅび)よくばけものを退治(たいじ)したというので、御殿(ごてん)は上を下への大騒(おおさわ)ぎになりました。たいまつをともし、ろうそくをつけて正体(しょうたい)をよく見(み)ますと、頭(あたま)は

さる、背中はとら、尾はきつね、足はたぬきという不思議なばけもので、鵺のような鳴き声を出して鳴いたことがわかりました。ばけもののむくろはすぐに焼いて、清水寺のそばの山の上に埋めました。

鵺が退治られてしまいますと、天子さまのお病はそれなりふきとったように治ってしまいました。天子さまはたいそう頼政の手柄をおほめになって、獅子王というりっぱな剣に、お袍を一重ね添えて、頼政におやりになりました。大臣が剣とお袍を持って、御殿のきざはしの上に立って、頼政にそれを授けようとしました。頼政はきざはしの下にひざをついてそれ

を頂こうとしました。その時もうそろそろ白みかかってきた大空の上を、ほととぎすが二声三声鳴いて通って行きました。大臣が聞いて、

「ほととぎす
名をば雲井に
あぐるかな。」

と歌の上の句を詠みかけますと、

「弓張り月の
いるにまかせて。」

と、頼政があとをつづけました。

なるほど評判の通り、頼政は武芸の達人であるば

かりでなく、和歌の道にも達している、りっぱな武士だと、天子さまはますます感心あそばしました。

三

頼政はその後ずっと天子さまに仕えて、度々の戦にいろいろ手柄をたてました。けれどどういうものか、あまり位が進まないで、いつまでもただの近衛の武士で、昇殿といって、御殿の上に上ることを許されませんでした。それである時、

「人知れぬ

大内山の
山守りは
木がくれてのみ
月を見るかな。」

という歌を詠みました。そしてせっかく御所に仕えながら低い位に埋もれていて、人にもしられずにいる山守りが高い山の上の月をわずかに木の間から隙き見するように、天子さまの御殿を仰いでばかり見ているという意味を歌いました。天子さまはその歌をおよみになって、かわいそうにお思いになり、頼政を四位の位にして、御殿に上ることをお許しになりました。

それからまた長い間、四位の位のまますてて置かれていたので、こんどは、

「上るべき
たよりなければ
木のもとに
しいを拾いて
世を渡るかな。」

とうたったので、とうとうまた一つ位がのぼって三位になり、源三位頼政と呼ばれることになりました。

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年6月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。